



企画にあたって

阿部弘太郎 (九州大学大学院医学研究院循環器内科学 教授)

肺高血圧 (pulmonary hypertension : PH) 診療は、定義・分類、診断アルゴリズム、治療選択のいずれも近年相次いでアップデートが行われています。2024年に第7回肺高血圧症ワールドシンポジウム (7th World Symposium on Pulmonary Hypertension : WSPH) が開催され、従来の WHO 機能分類に基づく評価から、マルチモダリティ指標を用いたリスク層別化へと治療戦略も変化しています。加えて、従来の3系統の肺血管拡張薬とは異なる作用機序を有し、肺血管リモデリング抑制を目的としたソタテルセプトが推奨されました。これらの背景を踏まえ、2025年に日本循環器学会 (JCS) ガイドラインの改訂に至り、日本の診療に即した実装指針が提示されました (図)。本特集では第7回 WSPH の潮流を踏まえつつ、日本のガイドラインの要点である PH の定義・臨床分類、非侵襲検査から右心カテーテル検査に至る診断、リスク層別化に基づく治療戦略、フォローアップを含む最新治療アルゴリズム、慢性血栓塞栓性肺高血圧症 (chronic thromboembolic pulmonary hypertension : CTEPH) に対するバルーン肺動脈形成術 (balloon pulmonary angioplasty : BPA) および肺動脈血栓内膜摘除術 (pulmonary endarterectomy : PEA) の位置付け、ならびに左心疾患・肺疾患関連 PH の診断と治療法について解説します。本特集が、読者の先生方の臨床現場に寄り添い、患者一人ひとりに最適な医療を届けるための確かな道しるべとなることを願ってやみません。

図 : WSPH, ヨーロッパおよび日本における肺高血圧症ガイドラインの変遷

